

木谷恭介

TOKUMA NOVELS 書下し長篇旅情ミステリー

阿寒湖わらべ唄殺人事件



書下し長篇旅情ミステリー

阿寒湖わらべ唄殺人事件

个谷恭介



間書店



TOKUMA NOVELS

木谷恭介

阿寒湖わらべ唄殺人事件

発行者 徳間康快

発行所 徳間書店

東京都港区東新橋一ノ一ノ一六 郵便番号一〇五-五五

電話三五七三・〇一一一、

振替〇〇一四〇〇-〇四四三九二

©Kyôsuke Kotani 1996

落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan

〈編集担当 磯谷 励〉

木谷恭介

TOKUMA NOVELS

書下し長篇旅情ミステリー

阿寒湖わらべ唄殺人事件



ISBN4-19-850336-2

C0293 P780E (0)

定価=780円(本体=757円)

あかんこ
うたさつじんじけん
阿寒湖わらべ唄殺人事件
こたにきょうすけ
木谷恭介

旅情ミステリーの書き手として確乎たる地歩を固めた木谷恭介だが、「謀殺列島」五部作をはじめ、作品に奥行きや深みを与える試みを重ねてきた。本作に接した読者は、その成果が如実に表れていることを実感するはずである。著者会心の自信作に仕上がっている。



TOKUMA NOVELS

書下し長篇旅情ミステリー

阿寒湖わらべ唄殺人事件

小谷恭介



間書店



TOKUMA NOVELS

木谷恭介

阿寒湖わらべ唄殺人事件

発行者 徳間康快

発行所 徳間書店

東京都港区東新橋一ノ一ノ一六 郵便番号一〇五-五五

電話三五七三・〇一一一

振替〇〇一四〇〇-四四三九二

©Kyôsuke Kotani 1996

落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan

〈編集担当 磯谷 励〉

目次

- 第1章 次郎湖・路の葉をかぶっていた女
第2章 和歌山・わらべ唄の空白域
第3章 東京代官山・完璧なレストラン
第4章 広川・史蹟いなむらの火の堤防
第5章 高粱・備中の小京都
第6章 阿寒・ふたたびの竹馬よいち

あとがき

第1章 次郎湖・落^{ふき}の葉をかぶっていた女

1

マリモで知られた阿寒湖は優美で女性的なイメー
ジがつよいが、雄阿寒岳^{おあかんだけ}の噴火と、その溶岩の堰止
めによつてできた湖なので、火山性の湖に特有の
荒々しさを随所にとどめている。

ことに阿寒川となつてながれでる南東部は入江の
ように両岸がせばまり、生い茂つた原生林が水辺ま
でせまり、無気味なまでの幽邃^{ゆうすい}さをみせている。

その入江の奥に遊覧船の立ち寄る滝口^{たきぐち}棧橋があり、
その滝口からすこし離れて、太郎湖^{たろうこ}、次郎湖^{じろうこ}とふた

つのちいさな湖が原生林にかこまれて静まり返つて
いる。

地図でみると涙の粒のようにちいさな湖で、事実、
学校のグラウンドほどのおおきさだが、太郎湖は阿
寒湖からながれ込む水が湖面をさわがせ、爽やかな
躍動感が湧き立っているし、そこからほんの四百メ
ートルほど森の奥へとたどつた次郎湖は、風のない
日など森や空がくつきりと湖面に映り、ひきずりこ
まれるような静けさをたたえている。

動の太郎湖、静の次郎湖。

どちらも湖畔には売店はおろか、湖を一周する歩
道もない。

阿寒湖めぐりの遊覧船が発着する滝口から、森ひとつ越えた距離だが、ここには手つかずの自然ののこっていた。

その次郎湖のほとりで、普段着姿の女性が殺されていると阿寒湖畔交番に観光客が知らせてきたのは、九月中旬のウィークデーの朝、十時ごろであった。

「女が殺されている？」

交番の石村巡査長は反射的に椅子から立ち、通報してきたふたり連れの男をみつめた。

ふたりとも五十すこしすぎで、身なりの立派な男だった。

「次郎湖が太古のむかしを連想させる、ぜひ行ってみるとすめられて行っただけです。そしたら登山道のすぐ脇の草むらに、赤いセーターを着た四十五、六の女性が仰向けに倒れていて……」

背の低いずんぐりした男のほう氣息をはずませながらいい、連れの男と顔をみ合わせた。

「どういう殺され方でした？」

石村巡査長が咄嗟に思いうかべたのはヒグマに襲われたのではないかということだった。

次郎湖あたりまでヒグマが降りてくることは滅多にないが、湖へ行くのは朝夕を避け、グループで行動するようにと、ホテルにそなえつけの観光パンフレットに書くようにしている。

「わたしは、気持ちが悪転して、よくみたわけではないんですが、首を絞められていたようです。綺麗な女性でした。旅支度をしているようにはみえなかったですから、この町のひとじゃないですか」

連れの背のたかいほうがいった。

「おい、行ってみてくれ」

石村は横で顔をこわばらせている若い巡査に命じ、巡査はオフロード用のバイクで飛びだして行っただ。

交番のある阿寒湖畔から滝口のバス停までは三キロほどで、そこからは雄阿寒岳の登山道を太郎湖、

次郎湖とたどることになるが、オフロード用のバイクなら現場まで行くことができなかつた。

登山道は一本道であつた。

「念のため、お名前と住所を聞かせてください」

石村はふたりに椅子をすすめた。

ふたりとも仕立てのよいスーツに、ひと目で輸入物とわかる色彩のあざやかなシャツを着ていて、次郎湖へ行ったことを裏書きするようにスニーカーをはいていた。

男たちは名刺を差し出した。

ふたりとも横浜市にある御子柴園芸という会社の役員で、ずんぐりしたからだつきのほうが専務取締役の平松治男、背のたかいほうが常務取締役で霜山栄さかき 栄といひ、ふたりとも五十二歳だつた。

「旅館はどちらにお泊まりです？」

「ホテル森尾です。朝のうちに太郎湖と次郎湖をみて、帯広へでる予定でいたんですが……」

霜山が面倒なことになったという表情でいった。

「いえ、そんなにお手間はとらせません。午後にはご出発いただけると思います」

石村はあたりさわりがないうちにこたえ、本署に電話を入れた。

本署は釧路くしろにあり、釧路署は北海道警の釧路方面本部と同居していた。方面本部は釧路、帯広、根室など十の警察署を統括するとともに、凶悪犯罪の捜査にあたっている。

石村の通報で釧路署と方面本部の捜査員が現場へ急行した。

もつとも、釧路から捜査員が駆けつけるのに一時間はかかる。現場検証がある程度すんだところで事情聴取をするとして、調書をとるのに三時間やそこらはかかるだろう。

平松と霜山にとっては降つてわいたような災難だが、一応、第一発見者なのだ。死体発見までの経緯

を調査にとるまでは、ホテル森尾にとどまってもらわなければならない。

石村は本署への通報をすませると、

「次郎湖にはかの観光客はいましたか」

あらためてたずねた。

「次郎湖にも太郎湖にもいなかったですな」

ずんぐりした平松がこたえ、

「太郎湖はともかく、次郎湖はわたしらふたりだけだと、ちょっと気味がわるかったですね」

瘦身の霜山が眉をひそめた。

滝口のパス停から太郎湖までが歩いて十分。阿寒湖からながれ込む清流の水音を聞きながらの道だし、太郎湖は眺めが開放的で明るい、そこからさらに十分、原生林の奥にある次郎湖は雄阿寒岳の地下水が湧きでる湖で、無気味な静けさをたたえている。

石村はその次郎湖を思いうかべながら、

「しかし、太郎湖や次郎湖をよくご存じでしたね」

と、たずねた。

アウトドアが流行のせい、このところガイドブックが競うようにとりあげているが、といって、誰もが知っている観光ポイントというほどでもなく、平松や霜山の年輩になると、み落としがちな湖であった。

「わたしら植物を商売にしとりますから……」

平松が名刺を指さしていった。

「ああ、園芸の会社でしたね」

「園芸といっても、いまはやりの園芸じゃないんです。サカタとかタキイなんかとおなじ種苗会社です。バイオをご存じですか」

霜山がそうたずね返し、

「種苗会社でしたか」

石村はふたりをみなおす目になった。

石村の実家は農家であった。米と野菜をつくっているが、米も野菜も北海道の風土に合わせて品種改

良が進んでいる。改良された品種は一代雑種がおおく、農家は自分の畑の作物から種をとることができない。毎年、たかい金をだして種を買わなければならず、種苗会社に首根っこをつかまれたようなもので、いまいい思いをさせられているが、それだけに種苗会社の収益力を知っていた。

サカタやタキイとなると、年間売上げが四百億円を超す超優良会社であった。

電話が鳴った。

石村が受話器を取りあげると、

「被害者はホチコックの青沼あおぬまふき子さんです。首をロープで絞められておりました。自分がみた感じでは殺されてから一時間か二時間……。二時間とは経ってないと思います」

バイクで飛びだしていった若い巡査が叫ぶように告げた。

「ホチコックの青沼ふき子……」

石村は反射的に表の通りへ目をやった。

ホチコックは交番のすぐ向かいであった。山小屋風の喫茶店で、ホチコックとはアイヌ語のアオバズク。いつも表の通りまでコーヒーの香りをただよわせている店だった。

青沼ふき子とは毎日のように顔を合わせている。

年齢は四十七歳、独身の美人であった。美人というだけでなく、気配りの細やかな女性で、石村たち交番の警官にコーヒーをプレゼントしてくれることがよくあった。

ホチコックのコーヒーは飛びきり香りがたく、高貴な味わいがした。

「そういえば、今朝の八時半ごろ、青沼さんが車で出ていくのをみかけました。滝口の駐車場に青沼さんの車と、もう一台がならんでまして、スウェーデン製のボルボです。あれはたしかホテル森尾の社長の車だと思います……」

若い巡査はホテル森尾の社長の森尾^{もりおなまじ}麦彦が、青沼ふき子と駐車場で落ち合ったのにちがいないという口調になっていた。

「わかった。本署にはさっき通報した。現場保存をしつかりと、な」

石村は頭のなかが真っ白になるのを感じながらいった。

ホチコックの青沼ふき子とホテル森尾の社長、森尾麦彦の仲は湖畔ではよく知られている。

青沼ふき子は四十七歳というものの、色白で華やかな顔だちの美人だった。そのふき子がいまでも独身でいるのは、森尾麦彦を愛しているからだと噂されている。

真偽のほどはともかく、ホチコックをはじめた資金を森尾がだしたことは事実だし、ホテル森尾は湖畔でもっとも古い旅館のひとつであった。

森尾麦彦は去年、妻を亡くしていた。年齢は五十

七歳だから、青沼ふき子と再婚してもよさそうなのだが、森尾には娘がふたりいた。

・長女が二十七歳で次女が二十二歳。

娘のどちらかに婿をとらせ、ホテルを継がせるとなると、再婚は面倒をまねくかも知れない。

それでなくても、森尾は古い旅館の主人にありがちな学究肌の人物で、逆に青沼ふき子は色気のかたまりのような女性であった。

青沼ふき子が森尾の煮えきらなさを責め、森尾はそんなふき子をもてあまして……。

石村はそう考え、あわてて頭を振った。

駐車場にふき子と森尾の車がならんでとまっていたからといって、森尾麦彦があやしいと考えるのは早計すぎる。

仮にふき子とのあいだでトラブルがあったとしても、森尾はひとを殺すような人物ではない。

石村はそう思った。

老舗旅館の社長が愛人を殺したとなると、秋の観光シーズン真っ盛りの阿寒湖のイメージが傷つくのではないかと、恐れも感じた。

いや、イメージはともかく、現実には湖畔の町の女性に殺されたのだ。

犯人は湖畔の町の住民の誰かであり、犯人の割り出しのため捜査員が大量に投入され、聞き込みがおこなわれるし、独身で美人の青沼ふき子の交遊関係が洗いざらい剥きだしにされる。

阿寒湖畔は阿寒湖の南岸の集落で、東西一・五キロ、南北五百メートルたらずの狭い地域に、千八百五十人が肩を寄せ合うように暮らしている。

日本でも屈指の観光地であり、森と湖と温泉の町だが、釧路から車を飛ばしても一時間。夏から秋にかけて絶えず観光客が出入りする賑やかな町とはいふものの、湖畔の住民にとっては外界から孤絶したようなものであり、住民全体が親戚同様のつき合い

をしている。

それだけに青沼ふき子の殺人事件は町をゆるがすにちがいない。

湖畔の町は疑心暗鬼にとらわれ、事件に関係のないプライバシーまで暴かれる者もでるだろうし、それがもとで有形無形のトラブルが続出するのではないだろうか。

石村の頭のなかが真っ白になったのは、警察官という職業を離れて、湖畔の住民のひとりとしてのおのきを感じたからであった。

2

森尾麦彦の長女的美弥子^{みやこ}が事件のことを知ったのは、宿泊客の平松と霜山が交番の石村巡査長につき添われて、もどってきたからであった。

美弥子はそのとき、湖をみはらすロビーの花を活

け替えていたが、その手をとめて石村へ目をやった。夜だと酔っぱらったあげく、警官に送られてくる客がめずらしくなかったが、よく晴れた朝のこの時刻だったから、交通事故でも起こしたのかと思った。平松と霜山、ふたりの宿泊客の名前までおぼえていたわけではないが、昨日の午後、レンタカーを運転してきたことは記憶していた。

石村巡査長がつき添ってきたのは、事故ではなかったようだ。

石村はフロントにいた次女の昌代^{まさよ}とふた言三言、言葉を交わした。

ロビーの美弥子に石村の声は聞こえなかったが、妹の昌代の顔色が変わったのは感じとれた。

昌代の顔色が変わっただけでなく、フロントの空気が凍った。

朝の十時半、ほとんどの客はチェックアウトをすまして出発したあとで、フロントと向かい合った売

店や玄関で従業員が掃除をしていたが、その誰もが一瞬、ストップモーションのように動きをとめた。

昌代は背のたかいほうの客にルームキーをわたし、ふたりの客がエレベーターに乗るのと、石村が玄関をでて行くのをみ送ったあとで、

「姉さん、大変！」

うわずった声をあげながらロビーへ駆けてきた。

「……？」

「ホチコックの青沼さんが殺されたんだって！」

昌代の目は引きつっていた。

「ふき子さんが？」

美弥子は頬つぺたを引っぱたかれたようなショックを感じた。

「それだけじゃないの。お父さんが疑われてるみたい……」

「どうして？」

「青沼さん、次郎湖で殺されたらしい。お父さん、